

ふるさととは（室生犀星）

ふるさとは 遠きに ありて 思ふもの

そして 悲しく うたふもの

よしや うらぶれて

異土の 乞食と なるとても

帰る ところに あるまじや

ひとり 都の ゆふぐれに

ふるさと おもひ 涙ぐむ

その ころもて

遠き みやこに 遠き みやこに

かへらばや

作者 加賀藩の足軽頭だった小島弥左衛門とその女中であるハルという名の女性の間に私生児として生まれた。生後まもなく、生家近くの雨宝院住職だった室生真乘の内縁の妻、赤井ハツに引き取られ、ハツの私生児として照道の名で戸籍に登録された。住職の室生家に養子として入ったのは七歳のときであり、私生児として生まれ、実の両親の顔を見ることもなく、生まれてすぐに養子に出されたことは犀星の生い立ちと文学に深い影響を与えたことだろう。

解説 ふるさとの金沢を出て東京での生活の時、ふるさとを懐かしく思った詩。

語釈 ※ふるさと＝生まれ育った地。金沢のこと。※よしや＝仕方ない。まあいい。ままよ。たとえ。※うらぶれて＝落ちぶれて惨めなありさまになる。※異土＝異国見知らぬ土地。※乞食＝他人から金銭や食物などを恵んでもらうこと。また、そのようにして生活すること。※あるまじや＝無いだろう。あるまい。※都＝東京。※かへらばや＝帰りたい。

通釈 ふるさとは、遠く離れてなつかしく思い出して悲しく歌うべきもので、たとえ異郷で乞食に落ちぶれても帰って来るべき所ではない。ふるさとを遠く離れた都会で、夕暮れには望郷の念に涙ぐむのが常だが、その思いを心に抱いてまた都会に帰って行く。